

二〇一〇年度入学試験問題 (第一回)

国 語 (五十分)

【注意】 一 この試験の問題文・設問は、1ページから11ページに印刷されています。

二 解答は、すべて別の「解答用紙」に記入しなさい。

三 文字は、正しくきちんと書きなさい。

四 、。「」はそれぞれ一字と考えなさい。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

初江と同じ名字のゆり子さんは成績がよい。ある日、二人の算数の答案が取り違えられて返された。初めは気づいていないようだったゆり子さんも、だんだん気づき始めたように初江は感じていた。結局ゆり子さんからは何も言っていないまま放課後になり、二人は初江の新しいかさに一緒に入って下校する。その途中で初江はついに自分からゆり子さんに答案のことを話すのだった。

ゆり子さんは、初江のことばを聞くと、かさの柄から手をはなし、

「えっ？　ほんと!?」

と、びっくりしたような声を出した。そして、

「気がつかなかったわ。」

と、今度は小さな声でいい、

「あたしも、なんだかおかしいとは思っただけど……、ちょっとえんぴつの字がこすぎるみたいだったから……。名前んとも、折りまげていたし……。ちょっと待って！　今、出して見てみるから。」

と、ひとりであわてていた。

〈九十五点と六十点―三十五点も差があるのに気がつかなかっただなんて！〉

初江は、むっとしたが、急にあわてたように自分の足もとにうずくまり、ふるえているみたいな手つきでカバンをあけ、そのなかを上のだん下のだん、中のだんと調べているゆり子さんを見おろしていると、ちょっとかわいそうにも思えてきた。あわい水色のワンピースのスカートのすそは、どろ水につかっているし、いつもさらっとしているきれいな髪が、べたつとぬれて、みじめなふうによじれたりもしているのだ。

ふたりは、雨にぬれながら、たがいの答案をこうかんした。道からはなれ、田んぼで働いている人たちは、学校帰りの女の子が、きれいな花がらもようのかさの下で、なにかプレゼントのこうかんでもしているようにとっただろう。このいそがしいさいちゅうに、早く帰っててつだいでもすればいいのにくらいに思っただろう。

とにかく、初江は、そうしてやっと自分の答案を手にしたのだ。初めて九十五点もとった答案を、初江は、ふるえ

ながら受けとった。手もふるえたし、くちびるもふるえた。

ゆり子さんがとりだした初江の答案は、なん回もなん回も折りたたまれていたので、いくつものすじがつき、とても今日返されたばかりの新しい答案とは見えなかった。また、かさの横からななめにふりこんでくる雨がかかっていた。はしのほうがぬれていた。

初江がとりだしてわたしたたした答案は、それに比べると、四つにしか折ってなかったし、それもきちんと折ってあったので、ずっときれいに見え、六十点と書かれた点数も、よけいはつきり見えた。

ふたりは、それから、同じようにだまって歩いた。ただ、初江は、なるべくふたりの足なみがそろわないように気をつけて歩いたし、ゆり子さんは、あまり大きないきをしないように気をつけているようだった。

それからゆり子さんは、それまでいっしょに持っていたかさの柄をなにげないふうにはなした。初江は、それで、ちよつとほつとしたものの、今度は、そうしたゆり子さんが、よけい雨にぬれるようになったので、ぬれないように、かさをずつとななめにかたむけ、さしかけてやらな

ければならなかった。^②それは思った以上に歩きづら

へきのうは、この雨がさをさすのが楽しみだったのに……。

^A初江は、なさけなくて、なきたくなかった。ゆり子さんは、そういった初江の気持ちを知ってか知らずか、だま

たまま、少しまを歩いていく。そして、急にたちどまると、

「あら、あれ、初江さんのおとうさんじゃないかしら？ あそこにいる人……。」

と、つぶやくようにいった。

「え？ どれ？」

初江は、おどろいて、ゆり子さんが見ているほうを見た。

「ほら、あそこのがけの上の田んぼ。おかあさんとおばあさんと三人で、田植えをしているじゃない。」

ゆり子さんは、^B少しほつとしたような明るい声でそういい、初江のかさの下から外へ出ると、左ななめむこうを指さした。

「どれ？ わかんないわ……。」

「ばかねえ、初江さん。自分ちの人がわからないなんて！ ほら、あそこ！ ほら、黒いカッパ着て、田植え機をおしてる人がいるじゃない！」

ゆり子さんは、ひさしぶりに白い歯を見せてわらった。

「ね、ゆり子さん。ここにあぜ道をとって、あそこへ行って、田植え機がイネを植えるところ、ちよつと見物していいかない!？」

初江は、はずむ声でそういった。

「うん。」

ゆり子さんは、すぐに賛成した。そして、さきにたつて、のぼりこうばいのあぜ道のほうに歩いていった。その横顔を見ると、少し緊張^{きんちやう}しているようでもあったが、半分以上はほつとしているように見えた。

初江はこれでもいいと思った。^Cやと肩^{かた}の荷をおろしたような気持ちだった。

雨は、少し小ぶりになってきたようだった。でも、初江は、かさをとじないで、ゆり子さんのあとについていった。あぜ道の両側にはえているエノコログサやヨモギ、スイバといった草が、冷たく足にふれ、ゆり子さんは用心し

いしい歩いていたが、^③初江は、あまりとんちやくしな

歩いていった。

ダダダダダダダダダダという田植え機のエンジンの音が、だんだん近づいてくる。

「おとうさん……。」

初江のほうに、さきによびかけた。

「おう、初江、もどったか！」

おとうさんは、すぐに気がついて、初江のほうをふりむいた。しかし、初江のそばにゆり子さんがいるのを見ると、とまどったように口をとじ、おどろいたような笑顔を

見せた。

「それで、どうだったの？ 初江。楽しみにしてた算数のテストの点は……。」

おかあさんが、わらいながらたずねた。

「だめだったの？ 待望の百点は……。」

すぐ目のまえにいたゆり子さんのほおがいつしゅんピクツとし、^④初江も、思わずゴクリといきをのんだ。

「ゆり子さんちは、農家じゃないからいいわねえ……。う

ちの初江も、てつだいなんかせないで本気で勉強させれば、きつともつとよくできると思うんだけどね……」

おかあさんは、なおもわらいながら、初江をかばうようなことをいうのだった。

^D「……」

「……」

初江たちふたりは、でくのぼうのようにつつ立っていた。初江は、なにかものをいわなければ、と氣ばかりあせって、なにもいえないのだった。

「え？ どうしたい。テストは返ってこなかったのかい？」

初江のおとうさんも、わらいながら、二、三步ふたりのほうへ歩いてきかけた。そして、ふたりのようすがいつもとちがうのを、敏感に感じたようだった。

おとうさんは、ほんの少し口をつぐんだあと、話題をかえようと思ったのだろう。明るい声で、

「しかし、今日は、雨がふってよかったね。」
といった。

おとうさんは、初江が新しい花がらの雨がさをきのうからひらいたりしたりしているのを見ていたので、けさ登校するとき、「今日は雨がふればいいな」といって送りだし

てくれたのだった。

^⑤初江は、くちびるをぐつとかみ、パチンと金具をはじかせて、かさをとじた。あざやかな花々の花びらの上にとまっていたつゆの半分は空中に飛び散り、半分は初江のひざから足にかけてこぼれ落ちた。

ゆり子さんは、「さよなら」のあいさつもせず、家にむかう坂道のほうへと、うつむいたまま歩きだした。

初江は、「さよなら」といっていいものか、いつものように「またあした」といっていいものかまよいながら、むなしくそれを見おくった。

^Eゆり子さんのあわい水色のワンピースの背中中は、いつもより小さく見え、せまいあぜ道をかしがりかしがり、さらに小さくなっていった。今までゆり子さんの成績がいいのは、頭のせいだと思っていたけれど、実際はそうではなく、自分たちの知らないところでものすごく努力しているのだという気が、そのうしろすがたを見ていて、とつぜん、した。

雨は、また少し強くなってきたようで、ときどき銀色のシャワーをふりまくようにななめに走りはじめた。

初江は、いぶかしげに見ているおとうさん、おかあさ

ん、おばあさん、三人のそばによって、遠ざかっていくゆり子さんを雨のなかに見おくりながら、

「そうだ、こんなことしてちゃいけない！ ゆり子さんちまでは、まだずいぶんあるもの。かさを貸してあげなくちゃー」
という思いにかられた。

^F初江は、かさを右手に持ちなおすと、ゆり子さんのあとを追ってあぜ道をかけたが、ほんとにこのまま追いか

【注】

*かしがりかしがり——体をゆらしながら歩いている様子。

(皿海達哉「花がらもよりの雨がさ」による。

なお、問題文を一部省略してある。)

問一——線部A「初江は、なさけなくて、なきたくなつた」とありますが、それはなぜか、理由を答えなさい。

問二——線部B「少しほつとしたような明るい声」とありますが、この声の変化からわかる、それまでのゆり子さんの気持ちとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 初江のかさに入って歩くことは歩きにくくて迷惑だと思っていた。

イ 初江の家族に対して答案の取り違えを謝りたいと思いつめていた。

ウ 初江と同じように答案の取り違えによって気まずい思いを抱いていた。

エ 初江とは違って自分は注意深いのだということを確認したがつていた。

オ 初江にうそをついていたことを指摘されるのではないかとおびえていた。

問三 — 線部C「やつと肩の荷をおろしたような気持ちだった」とありますが、ここでの「肩の荷」とはどのようなものを指しているか、答えなさい。

問四 — 線部Dで初江とゆり子さんはどちらも沈黙^{ちんもく}をしていますが、ふたりはなぜ沈黙したのか、この時の二人の気持ちをそれぞれ説明しなさい。

問五 — 線部E「ゆり子さんのあわい水色のワンピースの背中には、いつもより小さく見え、……小さくなっていた」とありますが、なぜゆり子さんの背中が初江の目には「いつもより小さく」見えたのか、理由を説明しなさい。

問六 文章全体の中で、初江はゆり子さんに対してさまざまな感情を抱いていますが、その中で最も感情を害している場面を、——線部①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。

問七 — 線部F「初江は、……はげまさればならなかった」とありますが、初江はなぜ迷っているのか、この時の初江の気持ちを七十五字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

飼っている生き物が死んだらつらいものである。とくに情熱^{かたむ}を傾けた相手を失ったとき、そのショックから立ち直るのには本当に苦労する。長年連れ添ったペットを失った人なら理解してもらえと思うが、親が死ぬより動物が死んだほうが悲しいこともあるのだ。なのに平気な顔をして飼いつづけるのはなぜだろう。

答えははっきりしている。「生き物を飼うことが好きな人」は、生き物を飼うことによって明日を生きる活力を得ているからだ。「死ぬとかわいそうだから生き物を飼わない」という人もいるが、生き物の死に出合うことは、生き物を飼う^{かう}欲^{ほつ}びの重要な要素であると認識してほしいと思う。飼っている生き物が絶対に死ななかつたら、それは生き物を飼っているのではなく、機械を所有しているようなものだ。いや、機械だつていつかは壊れる。たとえばビンテージカーのように趣味で所有する機械なら、壊れやすくて多少手間がかかるぐらいのほうが面白い。そうになると、死なない生き物など機械以下の存在である。「生き物」とは、言い換えると「死に物」なのである。

命の価値を知るいちばんの方法は死を知ること。死があるからこそ、命が輝いて見えるのだ。生き物を飼うことが好きな人は、生き物の命の輝きに惹きつけられるのであって、それは死という^①ハイケイ^{ハイケイ}を実感しなくては本当に味わうことはできないものである。

誰でも自分の楽しみで生き物を飼い、それを死なせてしまふことには多かれ少なかれ罪悪感を感じるものだが、それによって大きな犯罪を犯したように思いつめる必要はないと思う。もちろん生き物の命を粗末^{そまつ}にしる、というのはない。こんなことをいうと誤解する人がいるかもしれないが、飼育趣味にともなう殺生^{*せつしょう}は、健全な生物利用の一つなのである。

それは、美食家が味を楽しむために魚介類や鳥獣^{ちようじゆう}を(間接的に)殺し、その肉を食べたり(けつして生命を維持するのに必要な栄養を得るために食べているのではない。その証拠に多くの美食家がダイエットに関心をもっている)、釣り人が糸と針で魚を虐めて楽しむ(釣りとは、針にかかった魚が嫌がってあばれるときの感^{かん}触^{しよく}を楽しむ遊びである)のと同じ。またゴルフ場などの屋外^{ごうくしやう}娯楽施設の建設にも、膨大な量の殺生をとまなう。建設予定地の野山をその

ままにして、生き物を捕って遊んだほうが、そこでソコな
われる命の数は、はるかに少なくてすむのだ。

だからといって美食も釣りもゴルフも、それ自体は健全な趣味であり、非難されるものではない。生き物の飼育も同じ。人間が健康な精神を維持するために必要な、生物や自然の利用法の一つなのである。自分がナットクできるやり方で、生き物の命と死につきあえばいいのだ。

場合によっては、飼うことが生き物の虐待になったり、その命を縮めることもある。しかも、生き物のほうから飼ってくれと頼んだわけではなく、人間が勝手に一方的に飼いはじめたのだ(犬や猫などはいかにも飼ってほしそうに人間に甘えることがあるが、オオカミやヤマネコをそんな家畜に変えてしまったのも、やはり人間の勝手である)。ましてや、心が優しいから生き物を飼うわけではないし、命の尊さを学ぶために飼うのでもない。すべては己の快樂のためである。このことさえ自覚できれば、そして、すべての問題を自分で受けとめる覚悟さえあれば、それぞれの能力と倫理観に応じて好きなだけ飼育を楽しめばよい。なかには生き物を残酷な方法で虐待したり、法を犯す者もあるだろう。しかし、それは飼うという行為そのものが問題

りすることに反対する自然保護主義者のいうことは、どうも信用できないのである。

自然保護と生き物の採集や飼育とは、まったく別の問題だ。よく心ないマニアの乱獲によって生き物が危機に瀕しているようなことをいうが、私は、採集や飼育が趣味であるマニアが絶滅させた生き物などいらないと思っている。もしそんなことをしたら、いちばん困るのはマニア自身なのだから。Ⅱ Ⅰ、もしその証拠が見つかったとしても、それは全体のごく一部でしかないだろう。絶滅の原因の多くが環境破壊であることは明らかである。環境の悪化ですでに弱っているのだから、採集で追い打ちをかけてはいけないという理屈も成り立つが、だからといって捕ること自体が悪いことだと考えるのは大きな誤りである。

野生生物の消長を身近に感じ、深い関心を寄せているのはそれを捕っている人だろう。プロの獣師はもちろん、アマチュアの愛好家もそれに大きな歓びを見いだしているわけだから、人生をかけているといってもよい。真剣である。

《中略》

自分が興味のないものは必要のないものであり、極端

なのではなく、個人の「Ⅰ」性の問題である。

《中略》

人はなぜ生き物を飼ったりするようになるのだろう。私のまわりにいる飼育愛好家に話を聞くと、みんな物心ついたときからそうであったという。そして、そのはじまりが生き物を捕ることである点も共通している。私の場合も、小さいころにやった虫捕り遊びがはじまりで、飼育はその延長である。捕った生き物を家で触ったり眺めたりしたかったにすぎない。賢い子なら、それを研究や標本のコレクションといった大人っぽい趣味にハッテンさせるのだろうが、私の場合は基本的に昔のままである。

生き物を捕るということは、人が生き物に親しむのに格好の手段である。それをやるやらないは好みの問題であるが、生き物を飼おうという人には、自分の手で捕ることを体験してほしいと思う。自分の手で捕まえてみると、生き物との間合いの取り方がうまくなり、観察力も増す。そして、なにより飼うことが何倍も楽しくなるのだ。生き物を捕るということは、生物や自然への興味や愛着の根幹となりうる。

だからというわけではないが、生き物を捕ったり飼った

な話、地球上に存在しないのと同じである。私は都会にもいろいろな生き物がいると思うが、多くの人にとってそれは興味のタイショウ外で、存在しないものだから、「都会には生き物がいない」と認識されている。東京の渋谷のビル街でチョウが七種類も捕れたなどという、たいいていの人は驚くのだ。

もしかすると、大多数の人にとって豊かな自然など必要のないものかもしれない。自然は心の中にイメージとして存在するのであって、ときどきテレビの自然番組を見たり、それを愛し大切にしているという気分を味わえば満足する。野山に行つて爽快な気分を味わうのは自然があるからではなく、たんに広々とした空間がもたらす爽快感であり、そこにある木や草が人工的な品種改良種であつてもよいのかもしれない。

いや、そうではない、人びとは本当に自然を求め自然を守りたいと願っている、というなら、野生の生き物を捕ることを趣味にしている人は有能な自然のモニターだし、自然保護の重要な担い手となりうるのだから、もっと高く評価されてよい。メダカを捕ってそれを飼うのが好きな連中なら、魚を守るために、仮に水道が一日に何時間かし使

えないような給水制限になっても、それを喜んで受け入れるだろう。それでダムが一つ減らせるなら、お安い御用だ。

(木村義志「生き物を飼うということ」による)

【注】

*殺生——生き物を殺すこと。

*消長——生き死に。

問一——線部A「生き物」とは、言い換えると「死に物」なのである」とありますが、筆者はどのようにして「死に物」という表現を使ったのか、説明しなさい。

問二——線部B「それ」の指している内容を、本文中から三十字以内で探し、その最初と最後の三字を答えなさい。

問三——線部C「美食も釣りもゴルフも、それ自体は健全な趣味であり、非難されるものではない。生き物の飼育も同じ」とありますが、「美食」・「釣り」・「ゴルフ」と、「生き物の飼育」とは、どのような点が「同じ」なのか、説明しなさい。

問四【Ⅰ】にあてはまる語を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間

イ 動物

ウ 犯罪

エ 信頼

問五【Ⅱ】にあてはまる語を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 百歩ゆずって

イ 無い知恵をしぼって

ウ この期におよんで

エ 草の根を分けて

問六——線部D「大多数の人」とありますが、「大多数の人」は自然に対してどのような考え方をしているか、答えなさい。

問七——線部E「野生の生き物を捕ることを趣味にしている人は……自然保護の重要な担い手となりうる」とあるが、なぜ「野生の生き物を捕ること」が「自然保護の重要な担い手となりうる」のか、「興味」という語句を用いて、その理由を七十五字以内でまとめなさい。

問八——線部①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

問

問
二

問三

問四

初江
ゆり子

問五

問六

問七

問一

問二

1. $\frac{1}{2}$ 2. $\frac{1}{3}$	3. $\frac{1}{4}$ 4. $\frac{1}{5}$	5. $\frac{1}{6}$ 6. $\frac{1}{7}$
---	---	---

3

問三

問四

1001

問五

問六

問七

問八

④

①

⑤

②

なわれる

③

評 点

5

総
点

受 験 番 号